

2026 Winter  
NO.493

# AAR News



## 特集 国内災害支援 被災地とともに歩み続けて

### AAR ニュース 2026 冬号

- p1-5 特集：国内災害支援 被災地とともに歩み続けて
- p6 活動レポート：アフガニスタン東部地震緊急支援、台湾台風緊急支援
- p7 活動レポート：パキスタン洪水被災者支援 スタッフ日記：カンボジア
- p8-9 インタビュー：ロバート キャンベルさん（日本文学研究者）
- p10-11 インフォメーション
- p12 スタッフ紹介：竹居 志織（モルドバ駐在員）



特別インタビュー  
**ロバート キャンベルさん**  
「語ること、聞き手を  
持つことが人を救う」  
→ p 8-9



**AAR Japan**  
認定NPO法人 難民を助ける会



## 特集 国内災害支援 被災地とともに歩み続けて

AARは、東日本大震災（2011年3月11日）を機に本格的に国内災害支援を開始し、以来15年間、国内で発生した18の災害支援に出動してまいりました。さまざまな支援を行いながら、中でも障がいのある方々への支援、地域コミュニティの維持や活性化に注力しています。

能登半島地震（2024年1月1日）、東日本大震災の被災地で現在取り組んでいる活動を報告するとともに、東日本大震災の緊急・復興支援に携わった職員が現場での活動やそこから得た学び、これからの課題を語ります。

### 能登半島地震から2年

### 障がいの者の困りごと に寄り添う

能登半島地震から2年。石川県の被災地では、今も多くの被災住民が生活再建の途上にあります。とりわけ障がいのある人々は孤立しやすく、支援の網からこぼれやすい状況に陥ります。AARは、そうした方々の「困りごと」に寄り添う個別支援を続けています。

「通院が難しい」「地震で散らかった部屋を片付けたい」――。

震災直後からAARと協力して支援を行ってきた障がいの者団体のネットワーク組織である日本障害フォーラム（JDF）の「JDF能登半島地震支援センター」（七尾市）には日々、障がいの者やその家族からさまざまな相談が寄せられます。AARはJDFや地域のNPOと協力し、病院や福祉施設への送迎、家屋の応急処置、行政窓口での被災者支援制度の申請サポートなど、2025年12月1日までに93件の相談に対応してきました。

「困っているのはやっぱり食事かな。ヘルパーさんが来ない日は、近くのコンビニだけしか行けず、食事が偏ってしまう」。そう話すのは、ダウン症の娘（35）と暮

らす視覚障がいのある男性（77）です。AARはこの親子に対し、病院やショートステイへの送迎、買い物や携帯電話の手続きの付き添いなど、日常の小さな困りごとを継続してサポートしています。親子をよく知るマッサージ師の女性は「近所の助け合いだけでは難しい部分をAARが担ってくれて、本当に助かっています」と話します。

行政の支援制度は手続きが複雑で、障がいのある方には活用が難しいこともあります。知的障がいのある男性と自閉症の息子の世帯では、地震で浴室が破損。AAR職員が男性とともに市役所に行き、応急修理制度の申請をサポートしました。被災状況の撮影や業者への見積もり依頼も代行し、無事に



ショートステイへの送迎をするAAR能登事務所の柳町幸平  
＝石川県中能登町で2025年12月1日

浴室を修繕することができました。

AAR能登事務所の柳町幸平は「障がいのある方々と接していると、買い物や家事、洗濯など、多くの場面で手助けが必要だと感じます。そうした日常の困りごとにも目を向けながら、今後も伴走し続けたい」と話します。

AARは被災地で障がいのある人々の暮らしに寄り添い、必要な支援を届けてまいります。

## 東日本大震災から15年 コミュニティを守り 災害に備える

復興庁によると、東日本大震災で被災して今も避難生活が続ける人は約2万7000人(25年9月5日現在)で、9割近くが福島県出身者です。将来にわたって居住が制限される帰宅困難区域は同県内7市町(309平方メートル)に及び、東京電力福島第一原子力発電所事故の影響は今も極めて深刻です。

「夜中に震度6の地震が起きたら?」「真つ暗だね」「スマホのライトを使おうよ」――福島県伊達郡川俣町の小島(おじま)地区で昨年10月28日、同地区自主防災会と県立川俣高校の生徒、計約80人が参加する合同防災訓練

があり、図上訓練が行われました。

東日本大震災の際、川俣町民は自らも被災する中、原発に近い双葉町や浪江町からの避難者を受け入れました。その直後には町の南部が、避難が必要な「計画的避難区域」に指定されました。指定は17年に解除されたものの、町の人口は以前の3分の2となり、高齢化が急速に進んでいます。

同町の小島地区では、19年の台風19号の際、従来の防災マップに浸水想定危険区域の記載がなく、家屋などに大きな被害が出ました。そこでAARは、住民と川俣高校生が協力して被害調査と防災マップ作成に取り組むプロジェクトを提案・支援しました。これらは実用的な防災マップとして高い評価を受け、今回の訓練でも活用されました。また、2年から毎年実施されている合同訓練へのサポートも続けています。

合同訓練では住民と高校生がチームを組み、AAR提供の大型防災マップに土砂災害の危険箇所、避難所などを記入。続いて県の職員が「台風で警戒レベル2が発令されました。どんな対応をいつ、誰がすべきか考えて」などと次々課題を出し、参加者は「このルートで避難しよう」などと意見を交わしました。炊き出し訓練では、薪で火をおこし、

カレーなどを調理。小島自治会の新関厚会長は「災害時の自助、共助には訓練が必要だ。地域づくりについてのAARからのアドバイスは、全国各地の実例に基づいており、すごく助かっている。共同防災訓練ができたのもそのお陰。これからも一緒に活動していきたい」と話しています。

AARはまた、福島県から離れて避難した方々や被災地の住民の方々の孤



米国の日系人劇団によるコンサート＝福島県南相馬市の牛越団地集会所で  
2025年10月27日

立を防ぐコミュニティ活動を支援しています。25年10月には米国の日系人劇団「グレートフル・クレイン・アンサンブル」と協力し、南相馬市の復興公営住宅、牛越団地と南町団地の集会所でミニコンサートを開きました。コンサートに来た83歳の女性は、自宅が帰宅困難区域内にあり、戻ることができません。「昨年春まで栃木県に避難していて、やっと自宅に近い福島に戻ってきました。大家族で暮

らしていましたが震災でバラバラになり、今は団地で一人暮らし。片目も見えなくなってしまうましたが、今日は歌を聞いて楽しかった。ありがとうございました。」と笑顔で話してくれました。

福島を中心に、今も支援を必要とする方々が多数いるのが被災地の現状です。AARの国内災害担当の大原真一郎は、「原子力災害による避難指示が解除されても、原発に近いほど人口減少が著しく、支援する側も辛くなるほです。コミュニティが保たれることが、防災や弱者を守ることに直結しており、これからも福島の人々を支えていきたい」と話します。



# 東日本大震災被災地支援の学びをどう活かしてきたか

—それぞれが見た被災地の様子、注力した活動を教えてください—

**野際** 2011年3月13日の深夜、宮城県多賀城市に到着した私たちの前に広がっていたのは、いくつもの大災害が重なったかのような壊滅的な光景でした。その大きな衝撃を、支援活動に転換しようと努めました。



安否確認で訪れた施設。手前が野際＝宮城県気仙沼市で2011年3月21日

海外での支援経験から、障がい者や高齢者へ支援が届きにくい点に危機感を抱き、宮城県の依頼を取り付け、県内の福祉

東日本大震災から15年。AARは国内外で培った経験をもとに、災害支援を続けています。発災直後に現場に立った職員とその後の活動を支えたメンバーが、東日本大震災の経験をどのように後の支援へつなげてきたのかを振り返り、現在の課題、そしてこれからAARが災害支援の現場で果たすべき役割について語り合いました。

施設の安否確認および被災状況の調査、避難所などへの物資提供を開始。その数は1カ月で200カ所を超えました。岩手・福島県にも拡大し、食料や衣類などの物資配付のほか、炊き出しや巡回診療、コンテナハウスの提供、仮設入居者への家電支援、福祉施設の修繕など、できることは何でもやろうと東北事務所長として必死に走り続けました。2年間で支援物資だけでも18万の人々に届けることができました。国内外からの多大な寄付と助成金、そして自ら被災しながら地域のために尽力された地元の方々の協力があったからこそ成し得たことです。

**坂瀬** 私は13年4月に東北事務所長になりました。いわゆる復興期で、被災者の状況は本当に人それぞれでした。自宅を建て直して生活再建を始める方もいれば、大切な人を失い時が止まったままの方、原発事故の影響で故郷に戻れない方々。「誰一人取り残さない」ことを目標に、仮設住宅での健康維持や孤立を防ぐための交流支援「地域みんなで元気になろうプロジェクト」、仮設住宅への屋外遊具の設置、保育園への飲料水支援、原発事故の影響で外遊びができない子どもたちの野外活動支援「西会津ワクワク子ども塾」なども多様な活動に取り組みました。特に障がい福祉

**野際 紗綾子** (のぎわ さやこ)

海外の災害支援などを担当した後、東日本大震災の2日後に被災地に入り、2年間東北事務所長を務める

**坂瀬 (加藤) 亜季子** (さかせ あきこ)

東京事務局での東北事業担当を経て2013年3月から3年間、東北事務所長を務める

**生田目 充** (なまため みつる)

海外事務所駐在を経て2019年より国内災害支援を担当



AARが支援した施設の職員、利用者の皆さんと坂瀬 (右)＝岩手県大船渡市で2015年1月



59台

車両・コンテナハウスの提供



57棟



巡回バスの運営



炊き出し

約25,000食



支援物資の配付

約1,600カ所、18万人



体験型イベント

「西会津ワクワク子ども塾」のべ1,000人以上が参加



遊具や図書の設置・提供



仮設住宅入居者への家電などの提供

22,599世帯



巡回診療、医療機器支援

東日本大震災被災地での主な活動

施設の再建に注力し、支援要請のあった100力所以上を訪問。複雑な福祉制度に未曾有の被害を当てはめる難しさ、公的支援との役割分担の悩み、津波被災地域の土地活用問題……。課題に直面しながら必死に再建を目指す施設の方々、行政担当者との議論を重ね、施設の移転や修繕、設備の支援、授産品の開発や販路拡大など、それぞれの被害状況や復興度合いに合わせて支援を行いました。

**生田目** 19年から国内災害支援を担当しています。東北では福島県を中心に震災の教訓を活かした地域防災の推進、原発事故の影響が続く地域での交流促進、関東での広域避難者ネットワークづくりに関わりとともに、20年の九州北部大雨や24年の能登半島地震のほか、台湾地震などの緊急支援の現場で活動しています。

## — 東北での経験は、現在の国内災害支援にどう活かしていますか

**野際** 東日本大震災では障がい者の死亡率が住民全体の2倍に上りました。また、外国人には情報が届きづらく、必要な支援にたどり着きにくい状況も見られました。そうした方々をどう支えるかを常に意識し、試行錯誤を繰り返してきました。こうしたAARの経験は支援のネットワークの中でも活かされています。16年

に発足した全国災害ボランティア支援団体ネットワーク（JVODA）が、今年3月に公開した「分野別被災者支援コーディネート・アクションガイドラインへ多様性配慮」や、政府・NGO・企業・個人のネットワーク、ジャパン・プラットフォーム（JPF）による「原子力災害下における人道支援開始ガイド」の策定にも貢献することができました。

**生田目** 東北で築いた施設や当事者団体とのネットワークが、能登でも大きく活かしました。日本障害フォーラム（JDF）や、障がい者支援団体「ゆめ風基金」などと協働し、専門性を補完し合うことで、より迅速で包括的な支援が可能になっています。また、石川県七尾市の施設の方から「どうしていいかわからない時に、補助金の仕組みなどを教えてもらった。こちらの歩幅に合わせてくれる支援があった」と言っていたとき、これまでの実績を活かせ



西会津ワクワク子ども塾でのそば打ち体験。  
右が生田目＝福島県西会津町で2019年2月

ていると実感しました。

**坂瀬** 昨年の大船渡市の山林火災では、東日本大震災時に支援した団体からすぐに支援要請が来しましたね。AARへの信頼が続いていたことがわかりました。

## — 現在の課題とこれからAARが果たしていく役割は

**野際** 国内だけでなく、AARの活動国の多くでは、紛争が長期化し、災害が頻発化・激甚化しています。こうした恒常的な複合的な危機においても、障がい者など脆弱性の高い人々がより深刻な被害を受け、さらに復旧・復興からも取り残されていく「累積的被害」は大きな課題です。

**生田目** AARは障がい者や外国人が繰り返し直面する課題の解消に向け、地域の担い手と協力しながらインクルーシブ防災を進めていきたいと考えています。国内災害分野で要配慮者支援の専門性と連携をリードする役割を担っていきます。

**坂瀬** 長期的な支援は「いつまで続けるのか」と言われることがあります。しかし、復興の歩みは一人ひとり異なり、誰もが同じ速度で進めるわけではありません。だからこそ、寄り添い続けることがAARの役割だと考えています。これからも、AARだからできる、きめ細やかな、そして現場に根差した支援を続けてまいります。

## MONTHLY SUPPORTER

AARマンスリーサポーター for AAR Japan

AARの活動を継続して支えてくださるマンスリーサポーターを募集しています。



AAR マンスリーサポーター

Q 検索

## 障がい福祉施設の修繕・再建 支援／備品の提供

10年間で245件



## 障がい福祉事業所の 商品開発・販路開拓支援

10年間で73件

「地域みんなで元気になるプロジェクト」 15年間で約1,800回  
マッサージや傾聴活動、菜園や手芸活動、ミニコンサートなど



緊急  
支援アフガニスタン東部地震  
視覚障がい者世帯を支援

配付会場に食料を受け取りに来た視覚障がい者と家族  
＝クナール県で2025年11月8日

対象世帯の代表者に各地の広場へ来てもらい、小麦粉や食用油、豆など2カ月分の食料、石けん、毛布を配りました。また、視覚障がい者が使う白杖も提供しました。

ナンガハール県のハイダーさん（25歳）は13歳のとき、紛争で使用された爆発物を踏み、視覚と足を失いました。以来、兄弟のわずかな収入に頼って生活してきましたが、今回の地震で生活はさらに困難になりました。

アフガニスタン東部で2025年8月31日に発生した地震では約20000人が犠牲となり、1998年以降、同国で最も死者数の多い地震となりました。建物やインフラにも甚大な被害があり、130万人が深刻な影響を受けたと推計されています。AARは「アフガニスタン盲人協会」と連携し、視覚障がい者の家庭51世帯を対象に、支援物資を配付しました。

物資配付は11月初旬、クナール県、ナンガハール県、ラグマン県で行いました。

「地震後は家族も仕事を失い、食料も住む家もあります。障がい者は支援を受けるのが難しく、行政からの配慮も不足しています」。日ごと寒さが厳くなる中、テントで暮らすハイダーさんは「支援のおかげで冬を少し安心して過ごせます」と話してくれました。一方で、「生きていくには、継続した支援が必要です」とも続けました。

またAARは12月、女性が世帯主の被災家庭など、クナール県で約1200世帯への食料配付も行いました。

緊急  
支援台湾台風  
旧正月までに住宅の修繕を

台湾東部・花蓮県で2025年9月23日に発生した洪水では、死者15人、負傷者約100人の被害が出ました。AARは現地協力団体「基督教芥菜種會」（MSM）を通じて、被災者の住宅修繕や、避難所運営などの支援を続けています。

被災地では、同年7月に川の上流部で発生した地滑りで自然の堰止め湖が形成されました。その後、9月の台風で湖が決壊し、鉄砲水が下流の光復郷（こうふきょう）の街に流れ込みました。そのため短時間で街の大部分が濁流に覆われる大惨事となりました。

多くの住宅や店舗が被災し、避難者は約7000人に上りました。土砂の除去がひと段落した10月下旬以降、MSMは独居高齢者世帯を中心に家屋の修繕支援を行っています。約40戸で工事に着手しました。

支援を受けるスーさん（80歳）は「障がいのある娘と暮らしてきましたが、洪水で家具や電化製品をすべて失いま

した。家の壁も壊れ、親戚や友人の家を転々としています」と話します。

MSMは、今年2月の旧正月までに家屋修繕などを終えることを目指して活動を続けています。旧正月（春節）は台湾で最も重要な祝祭期であり、家族が集い新年を迎える特別な時期です。AARも、被災された方々が安心してこれまで通りの旧正月を迎えられるよう、支援を続けていきます。



被災した家屋の清掃を行うボランティア＝花蓮県光復郷で2025年10月



## 災害支援

### 2024年パキスタン洪水 溪谷の水力発電所を再建



再建した発電所の前に集まるバンダ村の人たち＝2025年7月

パキスタン北西部マンセラ郡のマヌール溪谷で2024年7月、集中豪雨により、家屋や農地などが流される大規模な洪水が発生しました。AARは、住民と協力し破壊された小規模水力発電所を再建しました。

マヌール溪谷は約14キロの長い谷に43の村が点在し、約4万5000人が暮らしています。中でも特に僻地のバンダ村では、洪水で村の発電所が壊れ、近隣の村を含む約150世帯(約1200人)

が停電に陥りました。夜間は真っ暗で、子どもは勉強できず、調理もできない生活が続き、「お腹を空かせた子に食事を作れない」「携帯電話を充電できず、緊急時に連絡できない」などの声が上がっていました。

AARは、どの資材を準備し、険しい山奥へどう運ぶかなど、住民と発電所の再建計画を作成。その後、AARが調達した資材を村近くまでトラックで運搬し、住民たちが建設現場まで運びました。水路の掘削や、発電機へ水を導くパイプの組み立ても住民が行いました。冬は大雪で工事を中断しましたが、雪解け後に再開し2025年夏、約1年かけて発電所が完成しました。

電気が戻ったことで夜には明かりが灯り、子どもは宿題に励み、母親は調理や洗濯ができるようになりました。発電所の「管理委員会」も設立され、定期的なメンテナンスをしています。村長のアリ・アスガルさんは「ようやく村全体が洪水前の暮らしに戻りつつある」と喜んでいました。

## スタッフ日記

### 絆深める「社員旅行」：カンボジア

フノンペン事務所 山本 啓太



昨今、日本ではあまり聞かなくなった社員旅行。カンボジアでは今も大人気で、「リトリート研修」と呼ばれることもあります。AAR フノンペン事務所でも例年、1～2月頃に実施しています。フノンペンから車で約3時間の観光地、カンボットやシアヌークビルへ二泊三日で出かけ、日頃の労をねぎらいながら年間の活動を振り返ります。

日中は、職員それぞれがテーマを設定して一組あたり1時間ほどの研修を行います。テーマは「分かりやすいプレゼンテーションとは」「具体的事例から学ぶ障がい児と保護者とのコミュニケーション」など、多岐にわたります。



研修で発表する山本啓太駐在員

夜は、ローカルマーケットで買った海鮮料理を囲み、ビールとともにカラオケ大会です。駐在員は青春時代に流行ったJ-popを歌い、現地スタッフはカンボジアのゆったりした歌謡曲を歌います。みんな歌詞の意味が分からなくてもノリノリで踊り出します。

こうした社員旅行のおかげか、他国事務所の駐在員や外部訪問者からも「とても良いチームですね」と言われることが多く、フノンペン事務所の自慢でもあります。職員同士の距離の近さが、私たちの強み。温かい仲間たちとともに、今日も活動を続けています。



カラオケ大会で盛り上がるスタッフ

## 「語る」と、聞き手を持つことが人を救う」

日本文学研究者で早稲田大学特命教授でもあるロバートキャンベルさんは、1年ほど前、ロシアによる軍事侵攻下にあるウクライナの人々の言葉を集めた『戦争語彙集』を翻訳し、訳著として出版しました。東日本大震災や能登半島地震の被災者支援にも関わっているキャンベルさんに、傷ついた人々の「心を支えるもの」について語っていただきました。

(聞き手：東京事務局 太田阿利佐)

## 戦争は言葉の意味を変えてしまう

『戦争語彙集』は、ウクライナの詩人オスタップ・スリヴィンスキーさんが、避難民の方々から聞いた言葉をまとめたものです。

ロシアによる軍事侵攻が始まり、オスタップさんが住むウクライナ西部のリヴィウには避難民が集中した。彼は、リヴィウ駅に降り立った人々にコーヒーを手渡したり、相談窓口案内したりするボランティアをしながら、自分や仲間が聞き取った言葉をFacebookで発信していたのです。私はその一部を目にし「新聞やメディアの記事では捉えることができない内容、目線だ」と直感しました。



2023年6月にウクライナを訪問し、その言葉を発した方々に会いました。オスタップさんが語ったことですが、戦争によって言葉は断片になってしまう、言葉の意味が変わってしまうんです。例えば「バスタブ」は、ミサイルが着弾し始めてからは「シェルター」になっています。おしゃれな稲妻形の「タトゥー」は、SS(ナチス親衛隊のマーク)に似ているので、ロシア兵に見つかったらそれを理由に殺されかねないものになってしまった。

## 「食べもの」

オクサナ リヴィウ在住

東部地域からやってきたご家族を一晚お世話することになりました。台所に案内して言いました。

「ここがキッチン。食卓にある食べ物を召し上がってくださいね」。

その瞬間、彼らは泣き始めたのです。「キッチンにある食べものを、召し上がってくださいね」という一言で。

『戦争語彙集』(三六頁)

## 胸を打つ『戦争語彙集』

『戦争語彙集』を読むと、自分が戦地から遠くない場所にいるような、避難民や、避難民を受け入れた人々に寄り添える気持ちになります。

オスタップさんは書いたものを本にしていますでした。先に日本語の本にしているのか悩みましたが、彼は「構わない。これは戦争が終わるまで続ける、進行中のものだから」と言いました。一つひとつが戦争

日本文学研究者  
ロバート キャンベルさん



で起きていることを伝える証言です。ウクライナの人々の言葉を、当事者ではない人に知ってもらうこと、ウクライナの人々に思いを馳せるよすがとして受け止めてもらうこと。これはもう通常の翻訳ではない、オスタップさんと伴走することだと思いました。



オスタップさん(右)とキャンベルさん  
＝ウクライナ・リヴィウで2025年8月

一度避難し、住んでいた街に戻った人もいます。5、6人に、それぞれが言葉を発した場所で会い、その言葉を朗読してもらいました。泣き出す人、沈黙する人がいました。でも等しく言われたのは「あの時にこの話ができてよかった」。支援物資や、しつかりとした屋根や、励ましの言葉もそうですが、自分のストーリーを語ること、それを受け取ってくれる人がいるということ自体が、実はシェルターの意味を持っている。それは、私が2011年に東北で経験したことと重なるところがありました。

## 「アート」は人間を強くする

―住み慣れた場を突然奪われることで経験する孤独や孤立は、戦争でも災害でも変わらないように思います。AARも、モルドバでウクライナ難民の母と子のための「チャイルド・フ렌ドリー・スペース」を作りました。能登半島地震の仮設住宅では、住民が交流できる「やわやわ喫茶」を開いています。

とても大切なことだと思います。石川県能美市のCACL(カクル)という会社の経営者、奥山純一さんは、能登半島地震で大量に割れた九谷焼を金継ぎで再生することを思いつき、その作業を仕事を失った輪島塗職人をお願いしています。地震で九谷焼がカケラになったように、ウクライナ戦争では言葉が断片化した。カケラはどのように修復され、修復することが人々にどんな力を与えるのかを知りたくて2025年8月、ウクライナを再訪しました。

北東部の都市ハルキウは、街のあちこちに爆破の痕跡があります。日本から来たというだけで腕をつかまれ、ありがとうと言われました。日本は多くの支援をしていることを知っているのですね。リヴィウにある負傷者や捕虜

になつて心に傷を負った人たちのためのリハビリ施設「アンブローケン」では、四肢を失った人たちが、粘土の作品や芝居や短編映画を作ったり、楽器を演奏したり、物語を書いたりしています。アーティストと一緒に何かを作りながら、運動能力を回復させていくのです。物質的なケア、医療技術としてのケア、そして教育・学習としてのケアに加えて、というか、それらと混ざるようにして私たちがアートと呼ぶものがすごく大事で、多様な役割を果たしています。

## 支援とは、被災者が発するものを受け止めること

―ウクライナや東北、能登から離れたところにいる私たちに、伝えたいことは？

新聞やテレビで実情を知り、被災した方々に手を差し伸べ、思いを馳せることがやはり大事だと思います。

8月にはウクライナの著名な詩人で、2人の息子を戦争で失ったスヴィトラナ・ポヴァリャエワさんを訪ねました。息子の愛犬と田舎の家で暮らしています。彼女はとても弱っています、私は、お茶をいただくだけでそつと

帰ろうかと考えていました。でも話をしているうちに彼女は、自分の記憶や、戦争は自分たちにとってどういうものなのかを、堰を切ったように語り出しました。

触れれば壊れてしまうような心の状況で、それらを語ることが、彼女にとって社会に一步戻る、近づくことなのだと思います。語る、聞き手を持つことがすごく大事なことです。当事者でない我々が、支援を必要とする人たちが発する言葉や、その人たちが作ったもの、その人たちから与えられるものを受け止めていく。それを心の中に持ち続け、他の人たちとシェアする。それが支援活動として大切なことではないでしょうか。能登には能登野菜という素晴らしい野菜がある。野菜もそれを作った人の作品です。東京電力福島第一原子力発電所事故による避難が続く福島県も同じです。被災者の方々が生産したもの、表現として作ったものに自分もかわる。それをいただく、買う、聞く、見るということが、当事者でない私たちからの支援として大事なことはないかと思っています。



## 現地の願いに応える支援を。

### まるとプロジェクト募金 2025

AARが世界各地で実施する活動の資金を一括でご支援いただく「まるとプロジェクト募金2025」。秋募集を含む7つのプロジェクトに対して、ご寄付を頂戴いたしました。ご協力に心より御礼申し上げます。残る2カ国のプロジェクトへのご寄付を引き続き募っています。ご検討いただけますよう、心よりお願い申し上げます。

#### 【募集中のプロジェクト】

**アフガニスタン：**パキスタンからの帰還民へ生活必需品を提供 (380万円×1口)

**ミャンマー：**障がい者を支え続ける職業訓練 (500万円×1口)



支援内容はWEBサイト  
またはお電話などで  
ご説明いたします

#### お問い合わせ

AAR 東京事務局 桐生、平井  
TEL：03-5423-4511  
E-mail：info@aarjapan.gr.jp

## グッドギビングマークの認証を受けました

AARは2025年10月、公益財団法人日本非営利組織評価センター（JCNE）が認証する『グッドギビングマーク』の第一弾認証団体の一つとして認定されました。同マークは、企業や個人が安心して寄付・支援できる環境づくりを目的に、ガバナンスや資金管理など、5分野14項目の厳格な基準を満たした団体のみに付与されます。今後も皆さまから信頼される団体であり続けるために、ご寄付を適切に管理・運用する体制の構築に努めてまいります。



## ザンビアの難民に教育を届けるクラウドファンディングを実施しました

ザンビアでの教育支援を進めるうえで欠かせない事業用車両の購入を目的としたクラウドファンディングに、110万5,000円のご寄付と沢山の応援メッセージをお寄せいただきました。ご協力に感謝申し上げます。車両の購入に向けて、引き続きファンドレイジングを継続してまいります。

## 2025 年冬募金

### 難民の女性と子どもたちの命を守る

11月にお送りした冬募金のお願いに対し、皆さまから温かいお気持ちをお寄せいただいております。心より御礼申し上げます。難民の女性や少女たちの尊厳が守られ、希望を持って暮らしていけるよう、AARは支援を続けてまいります。一人でも多くの方に支援を届けるため、引き続きのお力添えをお願いいたします。



ロヒンギャ難民の女性と子ども

## ケニアの難民の子どもたちに学用品を届ける「学校への懸け橋募金」ご協力ありがとうございました

ケニアの難民居住地で暮らす子どもたちに文房具や制服などの学用品を贈る「学校への懸け橋募金」に、209万541円のご寄付をお寄せいただきました。ご協力に心から感謝申し上げます。学用品の調達を開始し、2月より順次子どもたちに届けてまいります。



通学かばんを受け取った子どもたち

## 相次ぐ自然災害へのご支援

2025年3月に発生したミャンマー地震、8月のアフガニスタン東部地震、9月の台湾台風の緊急支援に、多くの個人と企業・団体の皆さまからご寄付をお寄せいただいております。50万円以上をお寄せいただいた企業・団体ののみをご紹介します。

#### ミャンマー地震緊急支援

公益財団法人毎日新聞東京社会事業団

#### アフガニスタン東部地震緊急支援

全国友の会

公益財団法人野村生涯教育センター

#### 台湾台風緊急支援

全国友の会

公益財団法人野村生涯教育センター



## バレンタイン・ホワイトデーにぜひ！ チャリティチョコレート販売中

美味しく味わいながら、難民支援にも参加できるAARのチャリティチョコレートは今季も好評をいただいています。バレンタインやホワイトデーの贈りものにぜひご活用いただき、世界の難民問題にも想いを馳せていた



4枚入り1箱800円（税込み）

だけですと幸いです。販売数に限りがありますので、お早めにご注文ください。



ご注文はチャリティショップHP  
またはお電話で承っています

## 書き損じハガキ・切手キャンペーン 2025-2026

4月30日まで  
受付中

AARでは、書き損じや未使用の年賀状・官製ハガキ、未使用の切手を集めています。集めたハガキや切手は、郵送物の発送に使用し、節約した経費はAARの支援活動に活用させていただきます。年賀状などの書き損じハガキや余った切手がありましたら、ぜひAARまでお送りください。詳細は同封のチラシをご覧ください。

### 「大阪マラソンEXPO 2026」ブース出展

2月22日（日）の大阪マラソンにあわせて開催される「大阪マラソンEXPO2026」で、AARは寄付先団体としてブースを出展します。近くにお住まいの方は、ぜひ会場でチャリティランナーの応援にご参加ください。

## 初めての「親睦会in関西」を神戸で開催しました

マンスリーサポーターおよび里親の皆さまとの親睦会を2025年11月2日、初めて関西で開催しました。神戸・三宮で開催し、京阪神地域や岡山、福井などから多くの皆さまにご参加いただきました。当日は、AAR関西担当でジャーナリストでもある中坪央暁がロシアの軍事侵攻が続くウクライナで撮影した動画と写真をお見せしながら、現地情勢と当会の支援活動をご報告。東京事務局の職員を交えた歓談に続き、長年ご支援を続けてくださっている方々を表彰する「ありがとうセッション」では、3名の方に感謝状を贈呈しました。皆さまからは「活動報告を聞いて、自分の寄付が確かに役立っていることが分かった」「ミャンマーの里子支援を長年続けて、子どもたちを支援しているというよりも、むしろ自分が多くをもらっているように感じる」などの言葉をいただきました。ご参加いただいた皆さまに、改めて感謝申し上げます。



参加された支援者の皆さまと AAR 役職員

## 深刻化する地雷問題への取り組み

2022年のロシアによるウクライナ侵攻以降、ウクライナでは地雷の汚染地域が急速に拡大し、地雷・不発弾による死傷者数も増加の一途をたどっています。2025年10月に東京でウクライナ地雷対策会議、12月にはスイス・ジュネーブで対人地雷禁止条約（オタワ条約）の締約国会議が開催され、地雷対策に向けた国際協力の枠組みや技術などについての議論が行われました。AARは、この問題をより多くの方に考えてもらうため、10月16日にオンラインシンポジウム「地雷被害が続くウクライナ～日本は何をすべきか」を開催。周辺国の条約離脱の動きや、30から40年要するとされる地雷除去の現状を報告するとともに、深刻化するウクライナ地雷問題と日本の支援の役割について活発な意見が交わされました。また、11月30日には、AARをはじめとする世界各国の市民団体が「ウクライナによる対人地雷禁止条約の不当な運用停止に関する市民社会共同声明」を発表。声明では、条約の義務停止は認められず、一方的な停止や脱退は条約の人的かつ生命を守るという目的を損ない、民間人の保護のためのこれまでの進展を危機にさらすと警鐘を鳴らしています。さらに、ロシアがウクライナで国際人道法を甚だしく無視し、市民に深刻な被害を与えていることへの強い非難も表明しました。AARは今後も、誰もが安心して暮らせる未来のために、地雷・不発弾対策の活動を続けてまいります。



シンポジウムの登壇者。左上から時計回りに浅田義教 JICA専門家、AAR会長 長有紀枝、AARウクライナ事業担当 オレーナ・マニブ、AAR地雷対策担当 紺野誠二





モルドバ・キシノウ事務所  
竹居 志織 TAKEI Shiori

## our staff | スタッフ紹介

# 障がい者が難民になったら、 どれだけ大変なんだろう？

モルドバ駐在員として、ウクライナ、モルドバでの難民・避難民支援事業を担う竹居さん。難民となった人々や障がいのある方々を支えることへの想いを聞きました。

### ―難民問題に興味を持つようになったきっかけは？

私は名古屋出身なのですが、難民や紛争について初めて関心を持ったのは、小学生の時にに行った「愛・地球博」かもしれません。自分と変わらない年ごろの子どもたちが銃を持って戦場に行く映像を紛争国のパビリオンで見、ショックを受けたことを覚えています。

はっきりと難民支援に携わりたいと思うようになったのは、大学生の頃です。シリア難民についての授業を受講し、あまりに悲惨な状況に衝撃を受け、難民問題を深く理解したいと思いました。自分に何かできることはないかと模索するようになり、留学先の米国の大学では難民支援のボランティア活動に参加しました。

### ―障がい者支援については？

正直に言うと、あまり意識したことはなかったのです。新卒で入った公益社団法人は様々な事業を行っていると、私は障がい者就労支援の事業所に配属されました。自分で希望したわけではなかったのですが、障がい者の自立支援や働きやすい環境について深く考えながら事業のマネジメントを経験できる貴重な機会となりました。知的・精神障がい者の方々と向き合う日々の中にも、自立をサポートする仕事にやり甲斐を感じていました。

そこで働いていた時も難民支援に携わりたいという想いはずっと頭の中にありました。ちょうどウクライナ危機が勃発した時期でもあり、こうした方々が難民になってし

まったら、どれだけ大変なんだろう、と想像したりしていました。

今振り返ると、小さい頃から障がい者と接する機会が多かったんですね。小学生の頃、障がいのあるクラスメートがいたのですが、先生も全部は対応できないので、お手伝いしていたら、自然とサポート役のような感じになっていました。障がい者支援については、導かれているというか、運命的というか、そんな感覚があります。

### ―モルドバではどのような活動をされていますか？

ウクライナ難民、国内避難民の中でも、障がい者や高齢者などの特に弱い立場にある方々に、医療支援や一人ひとりのニーズに即した支援を行っています。これまでに学んだことや経験が線となってつながった感じですね（笑）。キシノウ事務所には尊敬できる同僚が多くいるんです。どんな仕事をするかも重要ですが、誰と働くかも大切だと思っているので、私は恵まれているな、と感じながら、みんなで事業を進めています。



キシノウ事務所の同僚と

### 編集部より

東日本大震災と能登半島地震。いずれも厳しい冬に起きた震災です。卒業式の季節に東日本大震災を思い返すように、私たちは毎年、新年を迎える中で能登に想いを馳せることになるのだと思います。AARはこれからも、被災地の皆さまとともに歩みを進めてまいります。

# AAR News

2026 Winter NO.493

次号は2026年4月上旬にお届け予定です。

## 特定非営利活動法人 難民を助ける会

〒141-0021 東京都品川区上大崎 2-12-2 ミズビル7F

Tel.03-5423-4511 Fax.03-5423-4450

<https://aarjapan.gr.jp/>



AAR Japan